

一条校におけるアートを核にした 国際バカロレア教育 PYP カリキュラムの構築

代表者: 鈴木 光男 (国際教育学部)
分担者: 太田 雅子 (国際教育学部)
二宮 貴之 (国際教育学部)
モーテン・J・ヴァテン (国際教育学部)

1. はじめに

(1) 研究の背景

聖隷クリストファー大学では 2021 年度より国際バカロレア教員養成プログラム；International Baccalaureate Educational Certificate (IBEC) を開始し、聖隷クリストファー小学校・聖隷クリストファーこども園は 2024 年 2 月に IB 初等課程プログラム；Primary Years Programme (PYP) の認定校となり、IB プログラムコーディネーターが置かれ、IB の授業運営を手掛けながら聖隷学園ならではのカリキュラム編成・実践が進められている。しかしながら、学校教育法第一条に定められている学校故に日本の学習指導要領（幼保連携認定こども園要領）との整合性を図りながら、プログラム開発・カリキュラム構築は目下の課題である。

その中でもアートは、世界的な STEAM 教育（Science 科学、Technology 技術、Engineering 工学、Art 芸術、Mathematics 数学の 5 つの単語の頭文字を組み合わせた教育概念）への関心の高まりに見られるように、教育実践上の中核をなすものである。また経済同友会は、伝授・伝達型の均一性の高いこれまでの日本の教育から感性と創造性を培う多様性に満ちた教育への転換を求める提言を 2023 年 4 月に発表した。ここで求められる教育の転換は、正に探究を中心にしたものであり、IB やアートとの親和性は高いものである。

(2) 目的

本調査では IB を先駆的に行っているフィリピンの IB 校と国内 IB 校を訪問し、年間指導計画やプログラム、結果として生まれた作品や表現の資料を提供いただき、それらに関するインタビュー調査を行うことで、アートを中核にどのようなプログラムやカリキュラム・学習環境が用意されているかを確認し、一条校（学校教育法第 1 条に定められている学校のこと）でのプログラム開発・カリキュラム構築上の課題やポイントを分析・整理する。得られた知見をもとに、聖隷クリストファー小学校・園ならではのプログラム開発・カリキュラム構築に役立て、一条校におけるアートを核にした PYP（3 歳から 12 歳を対象とした Primary Years Programme）カリキュラムの構築へと繋げていくことを目的とするものである。

(3) 方法

① 調査方法

本調査では、各校の年間指導計画やプログラム、結果として生まれた作品や表現などの成果物を提供いただき、学習環境の観察と併せて IB プログラムコーディネーターを対象にインタビューガイドに沿った半構造化インタビュー調査を実施する。調査の焦点は以下の通りである。

- 1) PYP の Arts Scope and Sequence（範囲と順序）の枠組みの中で、学校の Programme Of Inquiry（探究プログラム、以下 POI）が具体的にどう位置付けられているか。
- 2) 国内外の IB 校で、アートに基づいた Unit Of Inquiry（探究の単元、以下 UOI）

の計画・指導・学習・評価・振り返りのプロセスや、関連する学習環境がどのようになっているか（授業参観はせず、学習環境の観察のみ）。

- 3) PYP では、アートは不可欠な学習分野としてカリキュラムに組み込まれている。アートに関するカリキュラムの中で、園児・児童は様々なアート（ダンス、演劇、音楽、美術など）を体験することが求められている。日本の学習指導要領と PYP の枠組みの中でのアートにおける探究の関連はどのように図られているか、そこでの課題は何か（国内校に対して）。

2. 調査報告

(1) フィリピン IB 校

①調査対象校概要

2001年に設立されマニラ市内にあるインターナショナルスクール（以下、P-IB校）では、PreK（3・4歳）から5年生までPYPが実践されている。

「厳しさとバランスのとれたグローバル教育を提供し、児童一人ひとりの可能性を育み、刺激する。学習コミュニティは、児童がフィリピン文化への深い理解と多様性の尊重を統合し、世界の複雑さを理解するよう促す。児童たちは、自立した考えを持ち、自信に満ちたコミュニケーターとなり、社会のために行動する市民となることを目指す」というスクールミッションを掲げている。スクールモットーは、「真理と光」(Veritas et Lumen)である。

- ・インタビュー日 時：2024年3月13日 8:00～15:00
- ・インタビュー方 法：現地訪問
- ・インタビュー対象者：校長・PYPコーディネーター
- ・インタビュアー：モーテ・ヴァテン 二宮貴之 太田雅子

マニラのインターナショナルスクール訪問に先立ち、ラオアグにある公立大学 Mariano Marcos State University (MMSU) および附属幼稚園および特別支援級を訪れた。訪問の目的の一つはフィリピンの幼児教育・教員養成におけるカリキュラム上のアートの位置づけを調査するためである。さらにナショナルカリキュラム・幼稚園でのアートのねらい・内容を理解し、IBスクールとの比較を行った。

ナショナルカリキュラム MATATAG CURRICULUM・KINDERGARTEN(2023)が示す発達に関する領域は、以下の6つである。

- ①Literacy, Language, and Communication
- ②Socio-Emotional Development
- ③Values Development
- ④Physical Health and Motor Development
- ⑤Aesthetic/Creative Development
- ⑥Cognitive Development

⑤Aesthetic/Creative Development においては、学習者は絵画制作 (drawing, painting, manipulative activities) を通して美的感覚、創造的表現力を発達させることを目的としている。また、美的発達のためには、アート、音楽、動きのある活動 (movement) の中で美を愛すること、追及することを含めている。さらに情緒、思考、感情、アイデア等の創造的表現の機会を作ることねらいとしている。

MMSUにおける幼児教育 (Early Child Education) に従事するための資格取得—保育者養成においては、「Creative Arts, Music and Movement in Early Childhood Education」3単位がアートに関する指導法をして取り扱われている。

学生は、同じキャンパス内にある附属幼稚園等で実習を行っている。附属幼稚園の見

学を通して理解したことは以下の通りである。学習のテーマと関連させながら、絵を描く、色を塗る、写真を選び・貼る・装飾する。身近な素材（卵の殻等）を用いて表現するというものである。ナショナルカリキュラムに示されているテーマ（Curricular Themes）は①Who we are and Our Families,②Exploring our Community,③Appreciating Our Country,④Caring for Our World である。

見学した特別支援級（写真 1・2）においては、アートコーナー（Creativity Station）が設定されており、絵画制作のための用具や素材が置かれていた。展示されている子供たちの作品は、テーマに関連しており、それぞれの異なる表現の現れに加えて、手指を使う（刺激する）ことを意図しているように思われた。



写真 1（左）特別支援級における絵画の展示

写真 2（右）特別支援級における絵画を用いた学びの様子

②インタビュー結果

半構造化インタビューガイドは事前にインタビュー対象者に共有されている。P-IB 校には、美術、音楽、PSPE（体育）の専科教師が配属されている。アートはすべての Unit Of Inquiry(UOI;以下ユニットと表現する・探究学習の単位である)に完全に統合されているわけではないが、プログラム全体のあらゆるユニットに何らかの形で組み込まれている。

③授業等観察結果

i) 授業観察① 幼児期（4歳）アートクラス（写真3・4・5）

幼児期 PYP コーディネーターは、最終作品に過度に注意を向けたり、それを賞賛するために多くのエネルギーと努力を費やしたりすると、子供たちが本当の興味を持たずに大人の承認を求めて行動するようになる可能性がある」と説明している。

P-IB 校でも、学習プロセスに重点を置くこのアプローチが実践されていることを見ることができた。このアプローチは、最終作品よりも探究過程と創造性を優先する。幼稚園から 5 年生までの子供たちは、重要なグローバルな問題を探究し、芸術的表現を通じて行動する機会が提供されている。

幼児期において、子供たちは遊び、探究、さまざまな教材や概念を用いて色々試しながら学んでいる。自分の考えを視覚化している明確な ATL スキルの実例を今回、観察できた。子供たちは発見するための自由を与えられ、それぞれの興味や好奇心に基づく問いに応じて、新しく創造力に富む方法を試してみる機会が提供されていた。

教師は情報を先に詰め込みすぎたり、子供たちを特定の方向に導いたりしないように特に注意していた。個々の子供が学習過程どこにいるかに応じて関わり、それぞれが自分なりの意味を構築できるように働きかける努力をしている。同時に、教師はプロセスを

丁寧にサポートし、足場（Scaffold）を提供し、各子供が必要な指導を受け、自立した思考と創造性を育むことを確かにしていた。

ii) 授業観察② 幼児期（5歳）アート掲示物の説明からの活動について

音楽と描画の活動：各自がさまざまなジャンルの音楽から一つ気に入った曲を選び、その音楽からイメージする内容を描画で表現している。さらに、自分の表現についてコメントをしている。

iii) 授業観察③ - 5年生 - Where we are in place and time ; 私たちはどのような場所と時代にいるのか

このユニットの中心的アイデア「過去の文明の証拠は現代の社会を理解するのに役立つ」は、児童たちと共に作られた。この探究は次に示す探究の流れに焦点が当てられている。

1.文明と社会の特徴
2.過去と現在のつながり
3.文化的信念と価値観が変化する文明を通して適応されるか

教師は、探究を刺激するために以下の質問を投げかけていた。

1.文明にはどのような特徴があるか
2.過去の文明はどのように現在とつながっているか
3.文化的信念や価値観はなぜ世代を超えて受け継がれるのか
4.文明とは何であるか



写真3 学習環境内でのアートの統合



写真4（左）ATL 思考スキルの向上：幼児自身のアイデアや質問を可視化する

写真5（右）ユニット「Who we are; 私たちは誰なのか」の導入：子供たちの好奇心を刺激し、「アートとは何か？」と考えさせる

これらの探究の流れに沿って、子供たちは人々が環境にどのように影響を与え、また影響を受けているかについての認識を徐々に広げていた。探究の一環として、時代についての理解を深め、過去の人々の考えや行動が他の（時代の）人々の生活をどのように変化させたか、その結びつきについて考えていた。さらに過去（の出来事）様々な方法で記録され、記憶されるかを認識した。また、人々が資源をどのように・なぜ管理するのかについて理解したことをデモンストレーション・展示を通して説明していた。

必要な知識とスキルを習得した後、子供たちは以下の行動を取っていた。

- | |
|--|
| 1.UN SDG 11: 持続可能な都市とコミュニティに基づいた自分たちの問題を提起 |
| 2.過去と現在の問題を結びつけた公共サービスについての発表作り |

筆者らは QR コードを通じてアクセスできる録画されたビデオを通じて、子供たちの公共サービスに関する発表を視聴した。これらのビデオは、「過去を知ることが現在をよりよく理解するのに役立つ」という各児童の概念的理解を示していた。この学習の証拠から、児童たちが環境への帰属意識と管理責任の重要性を理解し、自分たちや将来の世代のために環境を大切にし、ケアすることの意義を認識していることがわかった。

(2) 国内 IB 校

① 調査対象校概要

国内のインタビュー調査対象校（以下、J-IB 校）は、キリスト教の教えを基礎とした幼・小・中・高一貫校であり、PYP・MYP・DP 認定をされた一条校である。小・中・高の 12 年間については、4 年ごと 12 年間の「4-4-4 制」を採用している特徴をもつ学校である。

- ・インタビュー日 時：2024 年 3 月 25 日 19:00～20:00
- ・インタビュー方 法：オンライン
- ・インタビュー対象者：PYP コーディネーター
- ・インタビューア ー：鈴木光男

② インタビュー結果

事前にインタビュー対象者と今回の半構造化インタビュー・ガイドを共有したが、まだアートを核にした年間指導計画やプログラムは開発途上であり、2024 年度には音楽や体育だけでなく図工も専科教員が配置されるので、改めて PYP コーディネーターと担任、専科教員を交えて相談し、協働設計に当たるとのことであった。

③ 一条校で実践する際の課題とポイント

上記インタビューから得られた内容をもとに、J-IB 校におけるアートを核としたカリキュラムやプログラムを一条校で実践する際の課題とポイントを列記する。

- | |
|--|
| <input type="checkbox"/> アートの自己表現を奨励する |
| <input type="checkbox"/> 専科教員との連携 |
| <input type="checkbox"/> エキシビションの改革 |
| <input type="checkbox"/> アートの評価のあり方を理解する |
| <input type="checkbox"/> 児童の感性を尊重する |

3. おわりに

J-IB 校と P-IB 校で実践されているアート教育における違いは、教育システム、文化的背景、教育方針などに基づいている。以下、主な違いを列挙する。

- | |
|---|
| <u>○教育システムの違い</u>
日本的一条校では、文部科学省の学習指導要領に準拠したカリキュラムが採用されており、IB プログラムを取り入れる際にまずは学習指導要領との整合性を図る必要がある。フィリピンでは、国の教育基準やカリキュラムに沿って IB プログラムが導入されており、日本よりも IB の柔軟な適用が見られる。 |
|---|

○文化的背景の違い

日本のアート教育は、音楽や図画工作など教科ごとに分断され、教科学習として伝統的な技法や日本独自の美意識を重視する傾向がある。フィリピンでは、多文化主義やグローバルな視点を取り入れたアート教育が行われており、国際的なアートの動向に即した教育が実施される傾向が見られる。

○教育方針の違い

日本では、上記のとおり総合的にアート教育が捉えられてはならず、各教科また担当する専科教員により学習活動や内容が選定される傾向にある。フィリピンでは、児童の創造性や表現力を重視し、アートを通じた個人の成長や社会への貢献を促す教育方針が採られている。

表 1 は、非営利教育財団 国際バカロレア機構が「芸術の指導方法はどのように変わってきているか」というタイトルで提示している表である。日本の一条校におけるアートを核としたカリキュラムやプログラムを考える上で、非常に参考になるものと思える具体的な示唆に富むものである。黒太枠線は筆者によるものである。今後、一条校が目指す方向としてプログラムやカリキュラムづくりにおいて参考となるものであろう。

表 1 芸術の指導方法はどのように変わってきているか

強調されるようになってきた点	強調されなくなってきた点
学級担任や他の専科教師との「協働計画」や話し合いを行う。	他の教師と協働せず、個人的に計画をする。
芸術の教師が、「探究の単元」(UOI)の策定や、中心的アイデアの規定のプロセスにかかわる。	学級担任が探究の単元(UOI)を策定し、中心的アイデアを規定し、芸術教師に広める。
概念理解を設定する。	テーマを設定する：特定のテーマやトピックに関連した演劇、作曲、ダンスまたは美術など。
芸術の教師を PYP の教師と見なす。(教師自身もそう自覚する)	芸術の教師を単に専科教員と見なす。
学校やコミュニティーのさまざまな場所で児童が学習、観察し、パフォーマンスを行う。	芸術の授業中、児童は常に美術室にいる。
芸術を探究の手段とする。	芸術は PYP の他の分野を支える。
さまざまな様式、活動、評価、芸術体験を行う。	教科書主導の芸術カリキュラムを策定する。
児童は、複数の文化、性別、時代、言語の芸術に触れる。	児童は1つの文化による芸術のみにアクセスを許される
児童は芸術プロジェクトに向けて疑問をもち、個人の創造性が評価され、奨励される。	教師主導の芸術プロジェクトを行う。
芸術体験の裏にある概念を深く理解する。	表面上、芸術の従来的表現法を使う。
創作プロセスのすべての段階と成果物を通じて、児童が理解したかどうか定期的に評価する。	最終成果物やパフォーマンスのみ評価を行う。

*非営利教育財団 国際バカロレア機構「芸術の指導方法はどのように変わってきているか」『PYP のつくり方：初等教育のための国際教育カリキュラムの枠組み』(2016)より